Samuel Richardson の『日用手紙文例集』
——*Familiar Letters on Important Occasions* をめぐって——

村　瀬　順　子

はじめに

Brian W. Downs によれば、イギリスにおいて「模範文例集」の類が最初に出版されたのは1568年であったが、それは主にフランス語やイタリア語で書かれた類書の翻訳であり、独創的なものではなかったようである。ところが、17・18世紀になると、識字率の向上を反映して、庶民の間でも手紙のやりとりが盛んになると共に、格式ばった儀礼上の書簡ではなく、日常的な手紙の文範が多く出版されるようになった。Richardson が、『日用手紙文例集』の執筆を依頼された背景には、1735年に出た *The Secretary's Guide, Written by G. F. Gent* や1739年の *Several Letters, Containing Useful Directions for the Conduct of Young Persons in Private Life*（作者不明）などの文例集がかなりの人気を博していたという事情があったらしい。[1]

Samuel Richardson（1689-1761）は、少年時代から、近隣の女性たちに恋文の代筆を頼まれるほどの手紙の名手であった。しかし、彼が文筆に手を染めるのは50歳を過ぎてからであり、その頃すでにロンドンでも有数の印刷業者として成功していた。彼は仕事上、付き合いのあった出版社から依頼されて、*Familiar Letters on Important Occasions*（『日用手紙文例集』）を執筆することになる。これは、庶民の生活のあらゆる状況下でやりとりされる手紙の文例を示したものである。Richardson 自身が印刷工の徒弟から身を起こした、たたきあげの人間であり、庶民の生活の隅々に通じていただけに、その状況設定が非常に具体的かつ想像力に富むものであり、この文例集が、小説家 Richardson を生むきっかけになったというのも容易に納得がいく。実際、138番と139番の、あるお屋敷に奉公に出ている娘がそこの主人に貞操を奪われそうになったことを知って心配する父親の手紙とそれに対する娘の返事を書いているうちに、*Pamela*

(1740) の構想を思いついた Richardson は、*Familiar Letters* を一時中断して *Pamela* を二か月で一気に書きあげた。この *Familiar Letters* は、文例集という性格上、書き手の心理—sentiments—やその推移を細かく「瞬間に即して書く」(writing to the moment) ところまではいかないが、小説の材料になりそうなものが数多く盛り込まれている。また、それぞれの書き手になり切って書く、しかも、ついつい筆がすべって書きすぎてしまうといった Richardson 特有の滑稽さもすでにこの文例集の中に現れている。手紙の中では相手の反論に妨害されることなく、自分の意見を思う存分表現できる反面、しばしば度が過ぎて、相手に対して失礼な結果になったり、各々が自分の言いたいことだけを一方的に言うために、かえって意見の食い違いが増幅され、事態が紛糾する恐れがある。その紛糾ぶりを執拗に追及していったのが Richardson の書簡体小説であると言えるだろう。この文例集が当時、実際に手紙を書く際にどの程度、役立ったかは疑問であるが、この文例集の中に描かれた当時の庶民の生活ぶりや価値観、また後に書簡体小説において存分に発揮されることになる Richardson の手紙の特質といったものについて考えてみたい。

1. *Familiar Letters* の道徳性

Richardson がこの文例集の執筆を承諾するに当たっては、単に書簡の形式的な手本やスタイルを示すだけでなく、「人生の日常的な事柄において、正しく分別をもって考え行動する」(how to think and act justly and prudently in the common concerns of human life)[2] ための道徳的規範を与える、という教育的な目的を彼自身が納得する必要があったようだ。Richardson のこのような教訓癖は、この後、書かれることになる小説 *Pamela* や *Clarissa* (1747-8) においても明らかである。例えば、*Pamela* 初版のタイトルページには「若い男女の心に美徳と宗教の信念を養うために」(In order to cultivate the principles of virtue and religion in the minds of the youth of both sexes.)[3] というような但し書きが付け加えられている。しかし、Richardson が「美徳は報われる」(Virtue Rewarded)という副題をつけ、女性の鑑として描いたはずの Pamela が、見方を変えると、正妻の座と引き換えに純潔を高く売りつけたしたたかな女性のようにも見えるという皮肉な結果を生じ、盛んにパロディやバーレスク

が作られた。最たるものは Henry Fielding の作とされる *Shamela*（1741）であるが、Richardson の道徳性が誤解されたり、全く逆の意味に解釈されるのは、その道徳性が時にあまりにも物質的・世俗的であり、小市民的な損得感情に基づいているからであり、それが風刺の恰好の対象になるからであろう。しかし、Richardson としては大まじめなのである。こうしたギャップは *Familiar Letters* においてすでに現れている。

Familiar Letters には全部で173通の文例が収められているが、その内容を大きく分類すると次のようになる。

(1)　徒弟奉公に出ている若者に対する父母または親戚の者からの忠告の手紙
(2)　商売上の取引に関する手紙
(3)　借金に関する手紙
(4)　娘の結婚問題に関して、若者と父親（あるいは後見人）、娘の間で交わされる手紙
(5)　母から娘に宛てた手紙
(6)　兄弟間の手紙
(7)　友人の再婚問題に反対したり、忠告したりするもの
(8)　恋人に対する不満・恨みの手紙
(9)　推薦状
(10)　見舞・弔問の手紙

Richardson が序文の中で、使用人の義務とは何か、主人たる者、親たる者はいかにあるべきか、若者はどのように友人を選ぶべきか、いかにして適切な結婚相手を選ぶかといった問題についての処世訓を示したいとしているように、*Familiar Letters* においては、忠告や説諭を目的とする手紙が圧倒的に多い。大半は家族やごく親しい友人同士の間で交わされる手紙であり、パーソナルな性格を持つものである。徒弟奉公に出ている若者への手紙が多いのは Richardson 自身の経験に基づくものであろう。また、結婚問題に関しては、若者が直接、女性に接近したり、手紙を書いたりせずに、まず父親の許可を得るべきだという考えが表れている。

しかし、友人に対して、心からの忠告をしてあげたいという気持ちが、裏目に出そうな手紙もある。「親しき中にも礼儀あり」とことわざにもあるように、忠告してやろうという意気込みが度を過ぎると失礼になる場合もあるという例

である。ここでは、Richardson のいう道徳性が、意地の悪さと紙一重と思われるような例をいくつか取り上げてみたい。

友人から、その息子の進路について相談された人が、凡庸な才能しか持たない息子に高望みをしてはいけないと忠告している手紙（1番）は、その息子の凡庸さをあまりにも強調している点でかなり失礼な内容になっている。まず、書き手は「もし、あなたが認められないようなことを私が言ったとしてもあなたが相談する相手を誤ったことを責めこそすれ、私を責めるような余地はありませんよ」と念を押した上で、あなたはあなたの次男を弁護士にしたいようだけれどもあなたの息子は「弁護士になる才能も法廷で成功するのに必要な精神的沈着さもない」と言う。けれども「馬鹿ではない」のだから、その「非常に凡庸な才能」（very moderate talents）を有利に生かして、商売、それも手広い商売ではなく、品物を買って売るだけの簡単な卸し売りの商売に就けば、それなりに成功できるだろうと忠告している。本人としてはお世辞ではなく正直に言う方が相手のためにいいのだと信じているようだが、あまりにも歯に衣きせぬ、このような手紙をもらったら、もらった方は不愉快に思い、友人関係もこわれるのではないかと心配になる。ほんとうは何か恨みでもあるのではないかと勘ぐりたくなるかも知れない。Richardson 自身はこうした忠告が額面通りに受け入れられると信じていたのであろうか。

再婚問題に関する友人（ただし、Richardson が friend という時、それは家族や親類も含んでいる）からの忠告の手紙は、7例あり、財産や年令の点で不相応な相手との再婚にはことごとく不賛成の手紙ばかりで、中にはかなりおせっかいで失礼なものもある。例えば、140・141番の手紙は、資産家の紳士が、娘と同じ年頃の若い女性と再婚しようとしているのに反対する手紙であるが、まずその年令差から生ずるさまざまな不都合を挙げていく。あなたは今は健康でもそれはいつまで続くかわからない。年毎にあなたが弱っていくのとは逆に、相手の女性はますます意気盛んになっていくだろう。若者のたわいない楽しみを相手から取り上げるのはかわいそうだし、かと言ってあなたが無理に付き合うと世間からは父親か嫉妬深い監視人が心配して、ついて回っているように見られるだろう。あなたの財産は子供達の分を差し引いても相当なものと相手の女性は見込んでいるのでしょうが、そんなに若い女性が、あなたの亡くなった奥さんほどにあなたを愛することができるはずはなく、そんなみせかけの愛に

あなたは満足できるのですかと詰問する。この書き手は自分の手紙が相手を怒らせることは重々承知の上で、その 'good intentions' に免じて、さらにもう一通の手紙を書くことを許してほしいと言う。

二通目の手紙では、再婚することによって子供が生まれた場合と生まれなかった場合に今後の人生がどのような影響を受けるかについて論じている。もし、子供が生まれたら、年寄りの父親はみっともないし、また年寄りの身で子育ての苦労を再び繰り返さなければならない。ひょっとしたら、成長するのを見るまで生きていられないかもしれない。逆に、もし生まれなければ、妻も世間も夫の年のせいにするだろう。こどもを産み、育てることで女性は母親らしく、家庭的になり、まじめな人間と付き合うようにもなるものだが、こどもがいなければ独身時代と同じような仲間と付き合い、家庭の外に気晴らしを求めるようになるだろう。年令が離れていることを意識してあなたが遠慮すればするほど、相手はますます図々しくなり、甘えたり、怒ったりしては財産をむしり取り、私財を増やすことだろう。そして、と書き手は次のように続ける。

> それは一体何のためか。他でも無い、金持ちの未亡人になるため、恐らくはどこかの若い道楽者か放蕩者と共謀して、あなたの亡き骸を前にして勝ち誇り、あなたの財産や思い出をけなして、新しい男の方がどれだけいいかという、由々しき比較をする機会を得るためです。[4]

つまり、年の離れた女性と結婚すれば、その女性は財産をむしり取り、愛人を作って、夫が早く死ぬのを待って再婚するだろうと言うのである。これなどは再婚に対する反対理由を色々と考えているうちに想像力が昂じて好き勝手なことを言い、相手を怒らせるような失礼な手紙を書いてしまった例だろう。この手紙の書き手は相手の女性の人柄やその他の情況については一切知らない。年令が離れているという理由だけで、一般論から反対理由を展開しているだけなのだが、まるで堰をきったように次から次へと想像力が膨らんでいき、止どまるところを知らないかのようである。これは、自分の友人が若い女性と再婚することへのやっかみではないかと思われる手紙であり、受け取った方はかなり不快な思いがするだろう。この手紙が、Richardson の言うような道徳的機能を果たしうるのかどうか疑わしいし、また、模範文例になろうとも思えない。むしろ、これを読んだ相手がどのような反応を示すかを考えれば、こじれた人

間関係から物語が生まれてきそうである。*Familiar Letters* の面白さは、Richardson が意図したような道徳性そのものよりも、むしろ人間臭い感情の絡み合う物語性にあるのではないだろうか。

2. *Familiar Letters* の物語性

物語性ということで言えば、*Pamela* や *Clarissa* がそうであるように結婚問題に絡む親子間の意見の食い違いが面白い。*Pamela* のきっかけとなった138・139番の手紙では、娘は父親の忠告に従って主人の屋敷をすぐに飛び出し、事なきを得る。その他の文例においても娘は父親の忠告に従順に従う場合が多いが、食い違いが生じるところにはドラマも生じる。例えば91～93番の手紙において、年頃の娘を持つ父親は人から紹介された三人の人物について、一人は頭が悪く、一人は道楽者で、残りの一人は大酒飲みのため、いずれも娘婿としてふさわしくないとした上で、自分の友人で、年は離れているが人物の上でも財産の上でも好ましいと思える人物を結婚相手として娘に薦める。もし、どうしても嫌なら、それに従うしかないが、思うところを自由に聞かせてほしいと言う。それに対して、娘は父親の意見に従いたいのはやまやまながら、年が倍も違う人と結婚したくないと丁重に断る。すると、父親は自由に気持ちを聞かせてほしいと言っておきながら、娘の幸せを願う父親のためにせめて二三度会ってから決めてほしいと言い、さらには、どうしても嫌だと言うのなら、他に好きな男がいると考えざるを得ないと言い出す。Clarissa が家族から意に沿わない縁談を持ちかけられ、それを断ると Lovelace を愛しているからだと決めつけられて、家族から孤立し、身動きの取れない情況に追い込まれていくのと同じで、これも三通だけの手紙でなく、物語へと展開できる素材である。この倍も年上の人物が、もし、先に述べた、娘と同じ年頃の女性と再婚しようとしている人物と同じ人物であるとしたら、それらを組み合わせることでより一層複雑な物語ができるに違いない。

18世紀の厳格な家父長制は様々な物語を生み出すもとになっている。家父長制のもとでの結婚市場において、娘はまず親あるいは後見人の意見に従うべきであるとされていた。女性に求婚する場合も、直接、女性に接近するのではなく、まず父親の許可を得るべきであるとされ、Richardson はその模範例をい

くつかあげている。そうした手続きを踏まない者は、財産目当てかあるいは邪な動機から娘に近づこうとしていると思われても仕方がない。文例の中には、娘が親の反対を押し切って放蕩者と結婚したことを悲しむ父親のもとへ、もう一人の娘がとりなしの手紙を書いている例（66・67番）やその父親の兄（弟）が姪が不自由な生活をしないようにとりはからうことを申し出る手紙（169・170番）がある。娘婿は財産分与を求めて父親の前に姿を現すが、親の反対を押し切って結婚した娘に、父親は財産分与を拒否しようと考えている。ここでの教訓は、放蕩者が結婚すれば悔い改めるだろうという期待を持つことは間違っているということと、親の反対を押し切って結婚すると財産分与を受けられず、経済的に逼迫するということのようである。また、結婚の相手としては、士官よりも商人の方が経済的に安定しているので結婚相手としては適しているという価値観が見られる。

家父長制といっても、中にはあまり権威のない弱い父親もいて、妻の死後、再婚もせず娘だけを頼りに生きてきたのに、娘に早々と結婚すると言い出されて、愚痴をこぼす父親や、娘の求婚者に嫉妬している父親の手紙もある。しかし、未婚の若い女性にとって、保護してくれる両親や後見人がいない場合には、財産目当てや道楽者の男性の執拗な追求に対して、いかに身を守るかが重要な問題となる。Richardson は、そのような場合、直接、断りの手紙を書くことは、かえって悪用される危険があるので、必ず、誰か人を介して断りの手紙を書いてもらうことを勧めている。しかし同時に、結婚市場においては、断るだけではなく、夫を見つけることも必要なため、決定的な断り方をするか、あるいはより正式な求婚の余地を残しておくかに応じて、４通りに書き分けて文例を示している。以下、要点のみを書き出してみると、

文例１：断固たる拒絶

あなたの手紙を読んだ人はみなあなたの分別がいかに乏しいかがわかりますが、もし、このような恋文を書いてうまく行くことを期待しているとしたら、あなたは彼女の分別をずいぶんと見くびっているに違いありません。

文例２：それほど侮辱的でない拒絶

ノリス嬢にもうこれ以上手紙を出さないでください。彼女は自分自身をわきまえており、あなたの手紙からあなたがどういう方であるかもわかりましたので、お手紙をお返しします。感じ方も考え方もあなたによりふさわしい方にお送りく

ださい。

文例３：さらに優しい断り方

ノリス嬢は自分のことを思ってくださる方々には感謝していますが、現在の状況では、申し出をお受けする気持ちも権限もありませんので、これ以上手紙を送らないでください。

文例４：正式な求婚の手続きをとってほしい場合

重要なことはすべて尊敬する Mr. Archer の助言に頼っていますので、彼女の一存で判断することはできません。ただし、Mr. Archer が適当とみなすことは、彼女にも大きな影響力をもつことになります。[5]

翻訳でうまく違いを出すのは難しいが、手紙においてはこうした微妙なニュアンスも必要になってくるということであろう。

特に微妙になってくるのは、娘が親の承諾した相手を断る場合である。133～136番において、娘は気の進まない相手との結婚を回避するために、相手に求婚を取り下げてくれるように頼む(133番)が、両親の同意をとりつけて強気になっている相手は、他に好きな男性がいるのでない限り、納得できないと言う（134番)。それに対して、Richardson は、他に好きな人がいることをはっきり理由としてあげる場合の返事(135番)と好きな人がいないか、あるいはいてもそれを認めたくない場合の返事（136番）の例をあげている。

私は愛情をもって愛情に応えることができないのですから、その理由が何であろうと、どうぞ私のためだけでなく、あなたのために求婚を取り下げてください。他に好きな男性がいるなら、望み通りそうしようとあなたはおっしゃいます。わたしがあなたにふさわしくないということが、好きな人がいるということを告白したのと同じ結果をあなたの上にもたらすようにしてくださいませ。そうしてくだされば、私は永遠にあなたの下僕となり感謝いたします。[6]

ここで示されていることは、特に未婚の若い女性の場合には、本心を打ち明けたくないという複雑な心理が働くということであり、手紙によって言いたいことを伝えることは、そう簡単ではないということであろう。*Pamela* において、Pamela の心理を事細かに聞かされてきたはずの読者は、彼女の Mr. B への恋心を唐突に告白される時、驚きを禁じえないし、また *Clarissa* のように500通を越える手紙がやりとりされる作品においても、自分を凌辱した Lovelace を Clarissa がどう思っていたのかは最後までよくわからない。

手紙は日記ではなく、常に読み手を意識した社会性のある書き物であり、書き手は常に正直にありのままを語る訳ではなく、自らの複雑な心理を意識的あるいは無意識的に隠蔽する場合もあり得る。特に貞淑な女性の場合には、自己を表現するに際して、心理的な自己規制が働くのは当然である。同様に、読み手が相手からの手紙をどう読むか、どのような意味をそこに読み取るかもまた、読み手の心理状態に影響される。つまり、手紙をどのように書くか、そして、それをどう読むかといった書き手と読み手の葛藤が生じるところに手紙という形式が生み出す面白さがあり、もどかしさがあると言えるだろう。実際、直接会って話をすれば、案外、話は簡単に済むものなのかもしれない。

最後に、いかにも Richardson らしい中流階級の道徳観を示す興味深い手紙を紹介しておきたい。結婚した娘に人生の先達として助言を与える母親の手紙である。54・55番において、夫が浮気をしているのではないかと心配している娘に、母親は次のように助言する。まず、本当に浮気をしているなら、自分自身に落ち度があって、夫に愛想を尽かされたのではないかよく考えなさい。もし、自分に落ち度がなく、ただ夫が浮気症なだけの場合には、騒ぎ立てたりせず冷静に振る舞い、あなたの本当の愛が見せかけの愛よりもいかに優れているかということを夫に気づかせてあげなさい。もし、かんしゃくをおこして家が居心地の悪いものになれば、夫は開き直って、おおっぴらに他の女のところに走るでしょう。そうなれば、妻の気性が悪いせいだと男の味方をする身勝手なものたちがあらわれて、あなたのせいにされてしまうだけです。と、このように助言をした母親は、さらに次の手紙で、もし、浮気の証拠がなく、単に人の噂に惑わされて疑っているだけならば、むやみに騒ぎ立てて、逆に夫を浮気に追い込んでしまわないようにしなさい、と助言する。けれども、仮にそうなっても悪いのは夫の方であり、いつか間違いに気付くでしょう。それに、と母親は言う。

> 私のベッツィ、考えてもごらんなさい。不実な夫に苦しむほうが、夫が不実な妻に苦しむよりはましですよ。なぜなら、夫は嫡出子をさしおいて、私生児に自分と妻の家・財産を継がせることはできないからです。もし、そのような子供が生まれれば、国の法律が彼らに私生児の烙印を押すでしょう。それに対して、不実な妻はしばしば他の男との間にできた子供に夫の家・財産を継がせて、夫の子供や親族に損害を与えたりすることがあるものです。その他の点ではどちらも同じ

罪を犯しているにもかかわらず、女性が男性に与える損害は男性が女性に与える損害よりも大きいのです。[7]

ここには当時の中・上流階級のモラルに対する辛辣な皮肉がこめられているが、逆に言うと、いくら夫が浮気をしようと、他の女性との間にこどもができようと、正妻としての地位にある限り、家・財産は確保されているということであり、いかにも賢明な母親らしい忠告の裏には、損得計算に支えられたしたたかさが覗いているところが面白い。

おわりに

以上、見てきたように *Familiar Letters* において、Richardson は庶民の生活に関する様々な状況設定のもとでの手紙を通して、当時の庶民のものの考え方や価値観を浮き彫りにしている。Richardson 自身、実生活においてもたくさんの手紙を書き残しているが、Richardson の手紙との付き合いが少年時代に人から頼まれた代筆から始まったというのは、示唆的である。この文例集に示された手紙の書き手は多岐に亙っており、性別も年令も立場も実に様々である。Richardson は、まるで腹話術のように、その時々に応じて、ありとあらゆる書き手になりきって手紙を書いている。ある時は、忠告と称しておせっかいな手紙を書く友人として、姪や甥のよきアドバイザーとして、また、娘の結婚相手を吟味する父親やはたまた、結婚問題に乙女心を悩ませる未婚の若い女性として。そこに展開されているのは、言わば Richardson の奏でるポリフォニーの世界であり、それぞれの手紙に託された思いや複雑な心理を絡み合わせることによって、物語へと発展しうる可能性を感じさせる。そういう意味で、*Familiar Letters* は、正に *Pamela*、*Clarissa*、*Sir Charles Grandison* (1753-4) へと続く、Richardson の後の書簡体小説を生み出す原点となった作品と言えるのではないだろうか。

注

1 Samuel Richardson, *Familiar Letters on Important Occasions* (1741 ; reprt. The English Library, 1928), Introduction. 尚、テキストはこの版を使用した。

2 *Ibid*., Preface by Samuel Richardson.

3 Samuel Richardson, *Pamela or Virtue Rewarded* (1740 ; reprt. Houghton Mifflin Company, Riverside Editions, 1971) *Pamela* は初版以来、9つの改訂版が出されたが、このテキストは初版をリプリントしたものである。ちなみにペンギン版は1801年に出された最終版に基づいている。

4 *Familiar Letters*, pp. 170-1.

5 *Ibid*., pp. 129-131.

6 *Ibid*., p. 162.

7 *Ibid*., p. 63.